あとがき

今回の阪神大地震は何百年に一度おこるかおこらないかといわれる都市直下型の大型なものでした。これにより，多くの人命と建物などが失われました。被災地では電気・ガス・水道などいわゆるライフラインといわれるものが断たれ，交通や通信は麻痺状態となりました。

今回の地震は科学文明そのものを問い直す機会だと言われています。このことは環境教育にも言えることであります。災害や自然とのかかわりなど環境教育としてもとり入れたり問い直したりする必要があると思います。

被災を直接受けなかった人からは、地震のおこった時間が早朝でよかった，もう少し後だったらたいへんなことになった，とかこれが東京だったらもっと大きな被害になっただろうなどという言葉を耳にしました。ところが直接災害に遭った関係者からは，これが日中であったら助かったのに，というまったく反対の声が聞かれました。このように環境問題は立場が違うと考え方が違ってきます。このことから環境問題はどちらかと言うと第三者的な立場で行うことに対して反省しなくてはならないと感じました。

また、今回はボランティアの活動も注目されました。ボランティアの精神の三本柱である，自主性・無償性・公共性は環境教育の精神でもあります。今回は身近な多くの人々がボランティア活動に参加しました。そして，多くの人たちから頭の中では理解していたつもりであったが一体ボランティアとは何なのか，という問い直しの声も聞かれました。被災者とボランティアの間の暖かい交流はボランティアの人達にとっても感動の涙の体験であった一方，誠意が通じなかったりいろいろな現実の場面に直面し，これでいいのかと悔し涙も経験したとのことでした。

最近は学校においても環境教育が盛んになっています。多くの場合，自主的ではなく指定を受けてとり組んでいるようです。この場合，研究発表や活動を伴った実践を意識し過ぎて，環境問題の体験学習になったり，研究発表のための環境教育であったりして，指定期間が終わったら立ち消えてしまう線香花火のような活動だったりすることが多いようです。もちろん，環境問題体験学習や線香花火的な活動もそれなりに意義があります。しかし，それが環境教育のすべてではないと思います。では環境教育とは何かというと，決定的な解答はないと思います。環境教育は総合学習であるので教科の学習をしっかり行った上での総合化が望まれます。環境教育の基礎的研究も重視しながら，今回の災害を機に地震だけでなく水害その他すべての災害を意図した災害教育も環境教育の一環として必要になってくると思います。

災害教育も災害そのものや防災の学習に限らず，災害のストレスに耐えられる学習も大切だと思います。それには災害とは直接関係ない自然学習が有効であるかも知れません。多様な環境教育の研究や実践の投稿を編集者一同期待しております。

山田　卓三

編集委員
委員長　山田　卓三
加藤　憲一
金森　正臣
狩山　廣子
北野日出男
木俣美樹男
鈴木　善次
杉浦　嘉雄
東原　昌郎
米田　　健